

釜石の歴史よもやま話

6

釜石の鉄学編 (4)

問い合わせ
市世界遺産課 ☎22-8846

近代製鉄の発祥 ②

橋野鉄鉱山の建設

大橋の成功は盛岡藩に大きな影響を与え、翌年の安政5（1858）年には大橋の北側の橋野村青ノ木に藩が費用を拠出し高炉を建設することとなりました。そして大島高任の指導の下、仮高炉が建設されます。しかし、同年7月に安政の大獄で徳川斉昭が蟄居となり、那珂湊の反射炉が閉鎖されると、鉄は生産出来ても供給するところがないとなってしまいました。しかしながら盛岡藩は有力な鉱山ということで本腰を入れ一番、二番高炉も建設します。

一方、大橋は民営のままで、貫洞瀬左衛門の出資で、二番、三番高炉が建設されます。しかし盛岡藩は大橋を没収し、三河の商人高須清兵衛に経営権を渡します。こうして盛岡藩は6基の高炉を保有することとなりました。

鉄の販路拡大は難しく、初期においては仙台藩の石巻鑄銭場に出していましたが、仙台藩でも高炉を建設したため、断られるようになったことから、慶応3（1867）年、盛岡藩でも大迫銭座を設置し、鉄銭の生産を始めました。さらに、栗林にも銭座（分座Ⅱ支店）が設けられました。

その後、戊辰戦争で敗れた盛岡藩は解体となり、高炉場はすべて民営と

なったことから、各高炉場で銭座を併設し、鉄銭を作り始めました。この時期、釜石地域では7カ所13高炉が稼働し、一大製鉄地帯となりました。しかし明治政府が紙幣、硬貨を政府で管理していく目的で、明治2（1869）年に鑄銭禁止を命じたことから徐々に高炉場は姿を消していきます。なかには密造を行い、検挙された高炉場もありました。

県指定史跡 栗林銭座跡（栗林町第24地割）

栗林銭座は慶応3（1867）年5月に幕府が許可した盛岡藩最後の銭座



高炉分布図

で、大迫銭座の分座として盛岡藩御用達「木屋」砂子田源六（2代目）が開設し、同年8月から銭鑄造を始めました。

当初は橋野鉄鉱山からの銑鉄を使用していました。橋野鉄鉱山でも銭座を開設したため、明治2（1869）年に地元の栗林村の川崎忠兵衛が高炉を1基建設しました。

しかし、同年12月に鑄造禁止令が発令され、廃業となりました。その後、明治5（1872）年に鉄生産を再開しますが、明治10（1877）年代に廃業となりました。

史跡内には高炉跡や型場跡、御日払所跡、水車場跡、水路、種焼窯跡などがあり、御日払所跡には4代目砂子田



栗林銭座御日払所跡

源六が建立した記念碑があります。なお、栗林小学校の門柱は高炉の部材を使ったといわれています。

砂子渡銭座跡（甲子町第4地割）

貫洞瀬左衛門は、大橋が藩営となると、大橋高炉を建設した清岡澄に依頼し、元治元（1864）年、砂子渡に高炉1座を建設しました。経営はうまくいかず、松岡清蔵が引き継ぎ、さらに盛岡の豪商近江屋平野治郎兵衛と代わり、明治初期には高須清次郎が銭座を併設しました。明治2（1869）年の鑄銭禁止令により廃業となりました。

史跡内には水路跡と山神碑、手水鉢が残されています。また付近には砂子渡高炉の坑夫であったと伝えられている平四郎の墓があります。



平四郎の墓



砂子渡銭座山神碑

